

村上春樹に『ダンス・ダンス・ダンス』という小説がある。「いるかホテル」という古ぼけたホテルに迷い込んだ「僕」は、エレベーターで15階まで登っていく。ドアが開くとそこは完璧な暗闇で、壁を手探りで伝っていくと、羊の皮をまとった男が待っていた。羊男が言う。「踊るんだ。踊り続けるんだ。なぜ踊るかなんか考えちゃいけない。意味なんてこともないんだ」と。足が止まるとつながりがなくなると、もとの世界に戻れなくなってしまうと言うのだ。

そうか、と私は思った。踊りとは「私」をなくすことでありながら、もとの世界につきなぎ留めることでもある。音楽が鳴り続ける間は踊り続けなければならぬと羊男は言う。生物多様性が激減し、気候変動で大きな自然災害が起り、紛争や暴力の多発でおかしくなってしまう世界の現状は、私たちが踊りを止めてしまったからなのか、あるいは音楽が聞こえなくなってしまうからなのかではないか。人間は別世界を作り、もとの世界へ戻れなくなったのだ。では、もとの世界とはどんな世界だったのか。

新春エッセイ

私たちは再び踊り始めなければならない 共感と共鳴が地球の未来を創る——山極寿一

直立二足歩行の謎 音楽的な声、踊れる身体に

人類の進化史を遡ってみると、その出発点に直立二足歩行という変な歩行様式の登場がある。立って二足で歩くサルや類人猿はいない。なんでこんな歩き方が人間だけに発達したのだろう。

考えてみれば、この歩行様式は欠点だらけだ。四足歩行に比べて速力にも敏捷力にも劣るし、何より足が把握能力を無くしたので木に登るのが困難になった。サルも類人猿も手と足で幹や枝をつかんで木に登る。地上性の肉食動物に襲われたら、すばやく木に登れば助かる。この能力を無くして、さらに木のまばらな草原へと出て行ったのだから、直立二足歩行は不利だったはずだ。その不利を上回る利点とはいったい何だったのだろう。

これまで直立二足歩行の利点は、長距離をゆっくりとした速度で歩くのに適しているということ、手を歩行から解放して自由にしたことが挙げられてきた。たしかに、二足歩行は時速4キロメートルぐらいで歩くとエネルギー効率がいいし、長距

離を歩くほどエネルギーの節約率が高まる。食物が少しづつ広く分散しているサバンナで、遠くまで歩いて食物を集めるのにこの歩行様式は役立つことだろう。さらに、自由になった手で栄養価の高い食物を運んだに違いない。ゴリラやチンパンジーも時折食物を分けることがあるが、食物を運ぶことはできない。人類の祖先は食物を運ぶことができたからこそ、危険なサバンナで生き延びられたのである。

だが、もうひとつ大事なことを見落としている。二足で立つことよって喉頭が下がったという事実である。これは喉にスペースを作り、ずいぶん後に言葉をしゃべる能力を引き起こしたわけだが、それには歯列がアーチ状になったり、舌骨ができたり、何より脳の認知能力が増す必要があった。しかし、喉頭が下がったことよって多様な声、音楽的な声が出せるようになったことが大きかったのではないだろうか。

さらに、立つことよって身体の支点が上がり、上半身と下半身を別々に動かせるようになった。この変化によつて、身体をくるくる回せるようになり、手や腕で拍子をとり、足で

ステップを踏めるようになった。踊る能力が開花したのである。四つ足の動物は回転することが難しい。サルや類人猿には体を回転させるビルエットという踊りがあるが、その際二足で立つことが多い。鳥も求愛ダンスをすることがあるが、これも二足で立って踊る。直立二足歩行は踊る身体の出発点にもなったのである。

歌い、踊る意味 ピグミーのポリフォニー

ゴリラにはシンギング、ハミングという歌声がある。シンギングとは高く細い声で、子どもたちがよく出す。その声を聞くとおとなのゴリラたちが集まってくる。ハミングには2種類あり、一つはみんなが近くで散らばっておいしいものを食べている時に出る。低い声や高い声が連なって楽しそうに声を交わし合う。もう一つは伸びやかなメロディーで、若いオスがひとりである時に出すことがある。私はかつてそれを聞いて、ヨーロッパ民謡を人間が歌っているかと勘違いしたことがある。喉頭が下がっていないゴリラでもこれほど歌に近い声を出すのだから、立って喉

頭が下がった初期の人類はもっと多様な歌声を出せただろうと思う。

チンパンジーにはバント・フートと呼ばれる大きな声がある。大きく息を吸って肺をふくらまし、呼吸と吸気でそれぞれ声を発する。おいしそうなフルーツがなっている樹にたどりついた時、突然雨が降ってきて興奮した時に、みんなが大声で大合唱する。雷雨の際は興奮が高まって踊りだすのでレインダンスと呼ばれる。立って二足で走り出し、足で地面を踏み鳴らす。チンパンジーではすでに歌と踊りが組み合わされる萌芽が見えるのである。

私が敬愛する山尾三省という詩人がいる。屋久島の森に棲んで、野良仕事をしながら詩を書き続けた。亡くなる2年前に琉球大学で5日間にわたって講義した記録が『アニミズムという希望』（野草社）という本になっている。その中にこういう文章がある。「踊るといえるのは、歌と同じように魂の叫び」、「体の底から踊るといえることは、言葉を話すことと同様に人間性の深淵」。しかし、私は歌も踊りも、言葉の登場よりずっと前に出てきた人間の本質的なコミュニケーション手段だと思う。

1万年前に食料生産（農耕・牧畜）が始まるまで、人類の進化史の700万年近くは狩猟採集生活で彩られていた。現在でも狩猟採集生活を続けている人々がいる。私がゴリラの調査をする際に手伝ってくれたピグミー（※）と呼ばれる人々もそうだ。彼らはふつうリケンベ（指琴）を弾きながら太鼓をたたき、輪になって踊るのだが、ポリフォニーと呼ばれる合唱をすることがある。これは一人1音を発し、多くの人が発声しながらメロディーを整えていく。指揮者はいないが、しだいに勢いのある美しい合唱となっていく。それにダンスも加わって、みんなが一体となって歌い踊る。

弱みを強みに変えた戦略 仲間の体験を共有する

集合的な踊りとは、自分の身体を仲間に預け、仲間の身体を自分が受け止め、一緒にリズムを刻む行為である。考えてみれば、直立二足歩行はたくさん弱みを抱え、なお新しい強みを創り出す身体の変革だった。そこには歌と踊りが重要な役割を演じている。

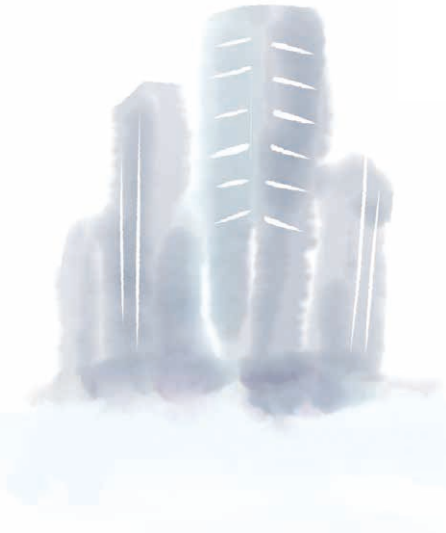
自由になった手で食物を運び、安全な場所で仲間といっしょに食べる食事という行為によって、人類は見えないものを欲望するという新しい精神性を手に入れた。待っている人々は、遠くへ行った仲間がおいしい食物を持ち帰ってくれるという期待を抱く。食物を探している人々は、そういう期待を抱いて待っている仲間がいるという気持ちをもつ。だからこそ、食物が人と人をつなぐ役割を果たし、食事は信頼を醸成する社会的な場となる。おいしい食物をいっしょに食べた人たちは、ゴリラのようにハミングを発し合ったかもしれない。

また、それらの食材がどこにあったのか、どのようにして採取したのかなど、情報が必要になり、それを身振りや手振りによって示すようになったであろう。今でも狩猟採集民たちは、その日に自分が経験したことを踊りの中で示す習慣がある。ゾウやバッファローやコブラの真似などをするのが得意だ。その身振りが次第にリズムを刻んで踊りとなったと想像するのは難しいことではない。いっしょに踊ることによって、仲間の体験を自分のものにし、それを共有することができるようになったのである。これこそ、言葉の登場前に人類が発達させた独自のコミュニケーションではなないかと思う。

俗にサル真似と言うが、サルには仲間の行為を即座にそっくり真似ることはできない。目的もわからずに、他人の動作をすぐにコピーするのは人間だけである。人間の子どもは生後半年ぐらいで、向き合った人の表情を真似し始める。この能力こそが人類の学習効率を高め、社会力を増進させる原動力になったに違いない。

羊男が言ったように、まさに人間は「意味なく踊る」のである。そして、おそらく人類は人間だけを相手にしてきたのではなく、他の多くの生物と踊ったのは活動のリズムが異なっている種は活動のリズムが異なっているが、どこかでそれを合わせて密接な関係を保ち、自然の流れを作っている。人類はそのリズムに同調し、流れに乗れたからこそ、次々に新たな環境に進出し、多くの生物と調和することができた。私が付き合ってきたピグミーの人々も、森のさまざまな

※ アフリカの熱帯降雨林に暮らす採集狩猟の民。成人男性の平均身長が 150cm 以下の民族の総称でもある。



やまぎわ・じゅいち

1952年、東京生まれ。現在、総合地球環境学研究所所長。霊長類学・人類学。40年以上にわたってアフリカ各地でゴリラの調査を行い、それをもとに人類の進化史の復元を試みている。主な著書に『共感革命』（河出新書）、『森の声、ゴリラの目』（小学館新書）、『争いばかりの人間たちへ』（毎日新聞出版）など。



『争いばかりの人間たちへ』
山極寿一 著
毎日新聞出版
1760円(税込)



『森の声、ゴリラの目』
山極寿一 著
小学館新書
1012円(税込)



ゴリラのドラミング